

講演原稿
'95. 10/6 (金)

人類の脱皮をねがって

1995. 8月

森 一久

1945年8月6日、私は当時京都大学湯川研究室在学中だったが、たまたま帰郷して、爆心から1・1kmの嵯町の自宅にいた。父母、兄と嫂、それに姪の5人を失い、結局私一人生き存らえている。うち母、嫂、姪の3人は消息もついに不明。私も3か月におよぶ高熱と貧血（白血球700など）で生死を彷徨うも、奇跡の蘇生、でも広島を再訪できたのは翌年5月。多くの偶然と親切に生かされている私としては、50年たってなお、核兵器廃絶のメドさえたっていないことに、虚しさの思いに耐えがたく、20万人の犠牲者の方々に対しても、慚愧の念にたえない。先刻のNPT延長会議においても、核兵器の否定ということについて、国際的には勿論、国内でさえ、ついに合意には到らなかった、・「必要悪」とか「抑止力」とかいって・・。

核兵器が究極の残忍な兵器でありながら、毒ガス等と違い全面禁止とならず、これを独占的に保有し続ける国連常任理事国が世界に君臨している理由や経緯は、たくさんあろう。私は、戦争道德に対する世界的な不感症が、（おそらく意図的に）戦後50年瀰漫してきたことが、その恰好な背景（舞台）となったことを指摘したい。

世界的な戦争道德の頽廃ないし喪失のきっかけとなったのは、第二次大戦での日独の軍国主義者の残忍な行為だったが、大戦末期には連合国側もこれに倣い（或いはやむを得ず）一般大衆や住宅地や人道施設に対する無差別攻撃を、大規模におこなった。ーードレスデン、東京そしてあげくの果てが、ヒロシマ・ナガサキであった。実際、最近公表された米公文書によると、原爆投下地点の選定基準の第一は、”爆心から3・5マイル以内に人口密集地があること”であったという。

そして戦後、この戦争道德の違反を最大の理由に、”戦争犯罪”の裁判は裁かれた。（このこと自体にも多くの問題を含むかもしれないが、それは暫くおくとして）しかし不思議なことに、この戦争道德の再構築ないし回復については、なんら真剣な議論も、国際的な話し合いもなく今日に至っている。理由は幾つかあろうー一天に唾と言われるおそれとか、”共に天をいただく”の類の東西対立が戦後すぐ始まった等々。けれども、戦後の秩序に責任持ってきたはずの大国の、このことに対する怠慢は重大と言わねばならない。その結果、核兵器のような大量破壊・殺戮兵器の開発と蓄積が当たり前のようになり、恐怖の均衡が大国の論理として幅をきかしてきた。さらに見逃してならぬのは、戦争道德の

欠落に対する正義感の麻痺が、この50年間の国際紛争をどんなに悲惨なものにしたことかということである。朝鮮戦争もベトナムも、そして冷戦解消後の東欧の底知れぬ闘いも、一旦戦争となれば相手国の大衆も皆殺しされても止むなしとの雰囲気、非戦闘員の殺戮に人類が不感症にさせられていることが、決定的な背景となっている。

”戦争道徳”という言葉ほど、空しくまた矛盾にみちたものはない。しかし、国際紛争の解決手段として戦争を放棄する国が日本以外には現れそうもない状況はまだまだ続くであろう。とすれば人類は、この問題に真剣に取り組むところから、霊長類として最低限の理性を取り戻す事から取りかかる他に道はないのではないか。そしてもし、これに目処が付けば、また次が見えて来て、さらなる理性の進化も可能となるかもしれない。このことは同時に、ラッセル・アインシュタイン声明の基本理念を具現する、ささやかな第一歩にもなる。

人間は個人として諦めたり悟ったりすることは比較的容易のようであるが、集団となると中々厄介である。その理由は、動物としての自己保存本能と人間特有の時間認識とを利用する各種の組織のためといえようか。しかし、歴史的に見ると、人間集団があるとき刮然として変革し脱皮した例は多い。ルネッサンス然り、奴隷の廃止にしても、あとで考えると、”よくもそんなことが罷り通っていた”と思える様なことを経験している。環境問題や公害問題についても、そういった例をおおくみている。

”京都フォーラム”のような幅広い科学者、哲学者、宗教家などを擁する場で、また45回にもなるというバグウオッシュ会議なども、このような人類の基本的な脱皮の契機をさぐって欲しいと切に思うものである。

以上